

日東電工がZLDを説明

神戸大先端膜
工学研究機構

オンラインで講演やサロン

神戸大学先端膜工学研究推進機構はさきごろ、膜工学春季講演会や膜工学サロンなどをオンラインで開催した。講演会は産官学からの講演4題、サロンでは水処理などIIグループで講演や意見交換などが行われ、約130人が聴講した。

冒頭、松山秀人・同機構長が昨年の動向として、特定テーマフォーラムの開催、「地域オープンイノベーション拠点選抜制度」への採択による経済産業省から3年間（令和2～4年度）の支援などを紹介した。

続いて、筒井誠二・環境省水環境課長が「水環境対策の動向と課題」と題して講演。底層溶存酸素量の類型指定案などや、大腸菌数を環境基準とするこの検討、昨年

5月に要監視項目となった有機フッ素化合物のPFOSおよびPFOAの暫定指針値50ng/L設定などを説明した。また、

今年12月に亜鉛含有量の暫定排水基準が適用期限を迎えるため、見直しに向けた排水実態の把握も推進。広域的閉鎖性海域の汚泥負荷量を削減する水質総量削減制度では、令和3年度を目的に総量規制基準および次期基本方針の策定を行う一方、削減方法として下水道施設などの整備が挙げられた。

続いて、越前将・日東電工第2開発グループ長が、排水・廃液ゼロ化に向けたZLD（ゼロリキッドディスチャージ）の取り組みとして、超高圧RO膜とNF膜を組み合わせた処理実例などを

披露。加藤隆史・東京大学大学院教授は、孔径0.6nmの均一構造であるナノ構造イオン導電性液晶高分子を用いて、水処理膜を創製し、ウイルス最大除去率99・9999%を実現したことなどを報告した。

サロンの水処理グループでは、新谷卓司・神戸大学大学院教授が「研究開発におけるセレンディピティ第9弾―RO膜開発を通して膜事業への影響―」として、日東電工での勤務経験を踏まえ、海水淡水化を国家事業とした米国のRO膜研究開発の歴史などを詳しく説明。研究開発にはセレンディピティ（偶然を発見する才能）や好奇心、粘り強さが重要とし、「まだ見えていない市場・顧客を想定し、社会変革を起こすような製品やサービスを生み出すイノベーション」などと強調した。

水 道 産 業 新 聞

2021年（令和3年）4月5日（月曜日）